



## 現代社会を支える人文学の展開－創立70年の蓄積に立って－

文学部長・人文学研究科長 奥村 弘

今年度から文学部長に就任いたしました奥村弘です。幕末から明治期の地域社会形成史と、歴史資料学を主な専門としています。後者については阪神・淡路大震災以来、全国的な災害時の歴史資料保存に携わるとともに、世界各地のコミュニティーの基礎をなす歴史資料についての実践的研究を進めてきました。また地域連携推進室長として、長年、本学の多様な部局と自治体や地域団体等との連携を図って参りました。これまでの知見を生かして、部局運営にあたる所存です。ご指導、ご鞭撻の程よろしくお願いたします。

文学部の前身の文理学部が1949年に神戸大学に設置されて、来年で70年になります。設立時、私たちの先輩は基礎的な学問の探求とそれを通じて養われる科学的精神の育成こそが、日本社会が世界的な文化水準に達するために必要であるとし、人文学の社会的役割を強く主張しました。私たちもその理念を受け継ぎ、教育研究を蓄積しつづけています。

オックスフォード大学東洋学部の日本学専攻学部生に対する教育プログラム(KOJSP)は、今年度6期生を送り出すことになり、卒業して日本にかかわる職業につく学生も増えています。本年7月、同大学の萩原順子先生が文学部で講演を行い、神戸大学で彼らが課題としたことが卒業論文のテーマへと展開していること、学生との交流が帰国後も続いていることなど、同大学を代表して、教員学生に対して感謝の言葉を述べられました。

昨年度から、日本学術振興会の事業として、松田毅教授をリーダーとした「生命・環境技術の社会実装に関する先端融合研究」がはじまり、ここでは人文社会科学の専門知を生命科学・環境科学者を加えた大学を超えた共同研究が進行中です。

また本年1月、神戸大学は、東北大学、人間文化研究機構との間で「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」の連携・協力に関する基本協定を締結しました。文学部は、西日本の拠点大学の主導機関として2018年度より、日本列島各地に伝来する歴史文化資料の保全を大学間の協力で目指す事業を推進することになり、西日本豪雨の被災各地での地域歴史資料保存にも協力しています。

4月には、神戸大学出版会が発足し、私たちの学問の成果を社会に出版物として問う組織的な基盤が本学に整いました。出版会最初の刊行物『地域歴史遺産と現代社会』は、本部局の地域連携センターの成果を、アスベスト問題を扱った松田毅・竹宮恵子監修『石の綿』は、倫理創成プロジェクトの成果を、それぞれ10年をこえる教育研究の中でまとめ上げたものです。

来年3月には、これまで国際的な共同研究の中で蓄積してきた表現手段としてのマンガの持つ多様な役割をテーマとして、70周年キックオフ国際シンポジウムを開催する予定です。創立70周年に向け、このような成果を学生教育に活かし、人文学の成果を社会で発揮できるよう、努力を続けていきたいと存じます。ご支援ご協力をお願いいたします。

### CONTENTS

研究科長 挨拶	1
研究最前線	2
最近の著作から	3～4
報告	5～6
イベント報告/近況	7～8



## 記憶と神話の間で形成されるアイデンティティ研究

アントン・アリーナ・エレナ 特任講師

専門は文学研究。最近の業績として、学会発表はアジア系アメリカ文学研究会第130回例会（2017年11月11日）、第121回例会（2016年1月30日）、第115回例会（2014年11月8日）。論文はThe urban space in fiction (*The Romanian Journal of Artistic Creativity*, Vol 4 (3) 2016年)、The country I had thought was my home: David Mura's *Turning Japanese: Memoirs of a Sansei* (京都大学人文学研究所 ZINBUN, No. 46 2016年)、Myth-made identity (*The Romanian Journal of Artistic Creativity*, Vol 1 (4) 2013年) など。

文化的対話は個人やコミュニティ開発の重要な要素であるだけでなく、平和、コミュニケーション、相互理解と文化的多様性の保全を促進するためのツールです。この信念は私の世界観の基礎にあり、そのため私は、アジア系アメリカ人による文学を専門に研究しています。特に、ヨーロッパという視点で北米の日系アメリカ人や日系カナダ人のアイデンティティを調査しています。

どうしてルーマニア出身の研究者である私が、このテーマを検討しているのでしょうか？ 2009年、大学院生としてコンスタンツ大学（ドイツ）へエラスムス留学をした間に、アジア系アメリカ文学に触れる機会があり、カナダや米国へ渡った日本人移民のアイデンティティの現象に関心を持つようになりました。そこで博士論文では、北アメリカ日系人の作家による6つの小説を取りあげ、記憶と神話の間で文化的アイデンティティがどのように形成されるかに焦点を当てました。

2014年春、文部科学省の国費留学生として京都大学人文科学研究所に受け入れられ、日本に帰国した日系人に関わる研究を進めてきました。帰国して中長期間居住している日系人、あるいは日本を一時的に訪問している日系人から、民族的・文化的アイデンティティについての目撃談を聞かせてもらいました。また神戸の海外移住と文化の交流センターや横浜の海外移住資料館で、日系移民の物語がどのように展示されるのかも検討しました。

これらに加えて、研究テーマに関連する学会、セミナー、ワークショップなどに積極的に参加しています。

現在、神戸大学の特任講師として教えることに加えて、1) 英米小説に描かれた日本、2) 多様化している日本で生きているハーフの人々のパズル、3) ハパ（北アメリカに生活するアジアや太平洋の島々にルーツを持つ人々）について、アイデンティティや自己認識のテーマに注目していきたいと思っています。



## 人間の創造的価値を探求する

大橋完太郎 准教授

専門は芸術哲学、表象文化論。主な業績として、『デイドロの唯物論』法政大学出版局、2011年。カンタン・メイヤス『有限性の後で』（共訳）、人文書院、2016年など

2015年10月から芸術学専修に着任しました。自分の研究にはいくつかの方向性があります。以下簡単に紹介します。

第一に博士論文で対象としたフランスの思想家ドニ・デイドロを中心に、フランス革命を準備した（と言われる）啓蒙思想の研究があります。デイドロは、哲学者、小説家、戯作者、美術批評家など多彩な活躍をした人物で知られており、ほかにも18世紀半ばから30年以上を費やして刊行された『百科全書』の編集者としても知られています。そもそも当時は、「哲学者 *philosophe*」という用語は今で言う学問的な一分野としての哲学に従事する存在ではなく、あらゆる物事に対して思考を働かせて判断する存在を意味していました。デイドロはそういった「万能人」的理想をもっていた人物の一人であり、必要に応じたアウトプットの形式として、哲学的な対話篇や美術批評、あるいは演劇作品などが執筆されました。多様な活動のベースにあったのはデイドロ独自の感性論＝美学です。異なるものを総合する流動的な知性・感性の働きを重視し、「怪物的なもの」を擁護するデイドロの思考は、近

代的思考の形式化が進んだ今日において、再度見直されるべきものとして注目されています。

近年は新たな研究に着手しています。感性論・美学的な展開としては、過去の記憶を美化する「ノスタルジー」の仕組みとその美学政治的な意味を考えています。とりわけオリンピックや万博に見られる近代日本社会におけるノスタルジックな傾向について、東西のさまざまな理論や芸術作品を通じてその心的運動がもつ効果を考えています。もうひとつの課題は「人間以後の芸術」というものです。芸術は人間的なものか否か？ ひょっとしたら芸術は徹底的に非人間的なものではないのか？ こうした問いを現代フランスの哲学・理論を参照しながら考えています。他にも18世紀フランス研究として、デイドロやジャン＝ジャック・ルソー、あるいは博物学者ビュフォンなど、当時の思想を哲学・博物学・人類学の交差点として捉え、その詳細を確認しながら、「人間」や「人為＝アート」という概念がいかにして立ち上げられ近代社会を方向付けたのか、ということも検討しています。

**沖森卓也、肥爪周二(編著)『漢語』** 朝倉書店 2017年10月

朝倉書店から、大学の教科書として出版されているシリーズ「日本語ライブラリー」の1冊です。一種の借用語でありながら、日本語の中では延べ語数・異なり語数ともに和語・外来語を上回る語種である漢語について、発音や語形、表記、文法、意味などの体系と歴史とを平易に解説した書です。石山は、2章「音形・語形からみた漢語」と、5.5節「漢語の意味変化」との執筆を担当しました。(石山裕慈)



**大坪庸介、アダム・スミス『英語で学ぶ社会心理学』** 有斐閣 2017年12月

社会心理学では、最先端の研究は英語で発表されるため、英語での学びが必須です。ところが、英語圏で使われる教科書は分厚く、日本人学生には高い壁となります。そこで、英語で社会心理学を学ぼうとする学生のための、敷居の低い最初の一冊(古典的研究に内容を絞り、それを簡潔な英語で紹介する一冊)を提供したいと考えました。本書では、初めて英語で学ぼうとする学生のため、見開きの左ページに英語による研究紹介、右ページに図表や日本語の解説を配しています。(大坪庸介)



**黄俊傑(著)、緒形 康(訳)『儒教と革命の間—東アジアにおける徐復観』** 集広舎 2018年6月

現代新儒家の一人である徐復観(1901—1982)の著作を、台湾生まれの著者が読み解きました。西洋列強や日本の侵略に苦しんだ20世紀中国に関して、儒教を立脚点に中国文化の立て直しに挑んだ思想家の挑戦を描きます。徐は1949年に台湾に渡り、儒教研究に専念。中国の専制政治を鋭く批判し、人民の主体性の回復を説きました。日本では馴染みのない思想家ですが、その指摘は儒教の可能性を感じさせます。(緒形康)



**Kazashi Nobuo & Marcella Mariotti, ed. *New Steps in Japanese Studies*:  
Kobe University Joint Research** ヴェネチア大学出版局 2017年6月

「頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム」(平成26—28年度)の成果の一部を収録した日本研究論集です。オンライン版も、ヴェネチア大学出版局ホームページにアップされています。構成は、Part 1. Literature & Culture: Crossings and Mitate; Part 2. Japanese Language and Japanese Education; Part 3. Nuclear Questions: From Hiroshima to Fukushima となっていて、オックスフォード大学、ハンブルク大学、ヴェネチア大学および神戸大学人文学研究科の教員・若手研究者などが論考(英語あるいはイタリア語)を寄稿しています。(嘉指信雄)



**ラッセル・グッドマン著(嘉指信雄、岡本由起子、大厩諒、乗立雄輝訳)  
『ワイトゲンシュタインとウィリアム・ジェイムズ—プラグマティズムの水脈』** 岩波書店 2017年8月

アメリカの哲学者ウィリアム・ジェイムズと西田幾多郎、あるいはベルクソンやフッサールなどとの関係はつとに知られるところですが、本書は、現代哲学を代表するワイトゲンシュタインにとっても、ジェイムズの影響がこれまで考えられてきた以上に深く決定的であったことを綿密な文献考証によって解明した、画期的研究書です——後期ワイトゲンシュタインの思想は、ジェイムズとの対話を通じて形成されたのであって、『哲学探究』にたびたび登場する、目に見えない対話者はジェイムズだったのです。ヨーロッパ哲学とアメリカ哲学の間に伏在する水脈を明らかにし、現代哲学史に一石を投じる斬新な解釈を提示しています。(嘉指信雄)



**川合康三、富永一登、釜谷武志、和田英信、浅見洋二、緑川英樹(訳注)  
『文選 詩篇』(一)~(三)** 岩波書店 2018年1月・4月・7月

梁の昭明太子の編になる『文選』は、現存する中国最古の詞華集です。前3世紀から6世紀に至る約700年間に著された詩文のうち、鑑賞に値するもの、創作の模範となるものを集めたアンソロジーで、のちの中国古典文学の基盤となりました。日本でも『枕草子』や『徒然草』で言及され必読の書とされてきました。本書は、『文選』の三分の一を占める詩の部分に、平易な訳と詳細な注釈を施したもので、難解な詩もできるだけ分かりやすく解釈しています。中国の学界から、本書を中国語に翻訳したいという希望も寄せられています。全6冊、2019年6月に完結の予定。(釜谷武志)



**佐藤昇(編)、神戸大学文学部史学講座  
『歴史の見方・考え方 大学で学ぶ「考える歴史」』** 山川出版社 2018年6月

本書は、神戸大学文学部史学講座の教員12名による啓蒙的論集です。各著者がそれぞれ専門分野の話題に焦点を絞り、「歴史学」的な視点の置き方や思考法を具体的かつ実践的に紹介しています。第1部では、周知の話題をとりあげ、従来とは異なる視点で分析する方法を紹介しています。第2部では、史料に含まれる嘘や偏向にいかに対処すべきか、検討を加えました。第3部では、建築物などのモノを史料として扱い、考察の視点や分析方法を紹介しました。(佐藤昇)



**児玉善仁(編集代表)『大学事典』** 平凡社 2018年6月

今日の大学はかつてない変動の渦中にあります。しかし大学というものは優れて歴史的に、かつ国際的に形成されてきました。こうした認識のもと、大学についての正確な知識と理解の拠りどころとなるべく、「高等教育」一般ではなく「大学」に焦点を当てて編纂された「最初の」事典です。テーマ編および項目編から構成され、白鳥は「知識人と大学」の大項目、フランス関係を中心とする複数の中項目、小項目を執筆しています。事項について調べるためだけでなく、気の向くままに徒然にお読みいただいても、いろいろな発見があると思います。(白鳥義彦)



**日本教育社会学会(編)『教育社会学事典』** 丸善出版 2018年1月

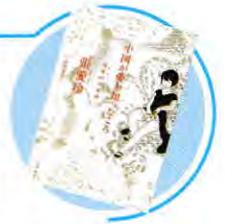
教育社会学会では1967年に『教育社会学辞典』を、1986年に『新教育社会学辞典』を刊行してきましたが、今回新たに「中項目」事典として『教育社会学事典』を刊行しました。第1部 教育社会学の理論(全4章)、第2部 教育社会学の方法(全2章)、第3部 教育社会学の研究領域(全13章)という構成で、全300項目からなります。白鳥は第1部の第2章「教育社会学の歴史」のなかの、「近代化・産業化と教育社会学」の項目を担当しています。(白鳥義彦)

**西原哲雄、田中真一、早瀬尚子、小野隆啓(編著)『現代言語理論の最前線』** 開拓社 2017年11月

本書は、一般言語学の主要4分野(音韻論、形態論、統語論、意味論・語用論)を網羅した、研究書・解説書です。日英語を含む諸言語における未解明の現象を紹介しながら、そこに著者によるオリジナルな分析を行い説明を与えた上で、各分野における理論との関わりを提示しています。田中はこのうち、音韻論の分野の章を執筆し、大阪方言における外来語のピッチ付与の世代差・変化について分析しています。(田中真一)

**張愛玲(著)、濱田麻矢(訳)『中国が愛を知ったころ 張愛玲短篇選』** 2017年10月

「公平? 人と人との関係に、公平なんて二文字はもともとありえないわ。」逃れえぬ想いの先に、彼女たちは何を見たのか。家族制度と自由恋愛、感情と経済、せめぎあう愛のかたちとそのゆくえ。中華圏で現在も熱狂的に読み継がれている孤高の作家、張愛玲(1920-95)の小説集。香港の豪邸を舞台に展開する上海の少女薇龍の恋を追う「沈香肩 第一炉香」、自由恋愛の輸入と実践をコミカルに描く表題作、人民共和国成立後、米国に移民した二人の女性の再会を見つめる「同級生」。いずれも本邦初訳。2017年Twitter文学賞8位に選ばれました。(濱田麻矢)

**ライプニッツ著作集第2期第3巻、松田毅(共訳)****『技術・医学・社会システム——豊饒な社会の実現に向けて』** 工作舎 2018年6月

微分・積分の記号発明により数学者として名高い、哲学者、ライプニッツ(1646-1716)。その第2期著作集の最後の巻第2部「医学」に「シュタール医学論への反論」が採録されました。原文はラテン語で本邦初訳。註と解説、合わせて80頁ほど。シュタールは科学史では燃焼に関する「フロギストン」説が知られますが、ライプニッツは「機械論的生物学」の立場からその「生氣論」を批判しました。邦訳はライプニッツの「生物哲学」の概要を教えます。(松田毅)

**松田毅、竹宮恵子(監修)改訂新版『石の綿—終わらないアスベスト禍』** 神戸大学出版会 2018年7月

2012年に出版の『石の綿—マンガで読むアスベスト問題』(かもがわ出版)の改訂新版。この間の事態の変化を踏まえ、前作の採録・改作を行い、新しくストーリー・マンガとして「震災とアスベスト」と「エタニット—史上最大のアスベスト訴訟」を加えました。第2部では、医療や補償、訴訟やリスクコミュニケーション、市民運動、世界全体の動向に関するコラムを盛り込み、この問題が終わっていないことを訴えました。(松田毅)

**宮下規久朗『美術の力 表現の原点を辿る』** 光文社 2018年1月

本書は、私が7年前から『産経新聞』に毎月連載している「欲望の美術史」の最近の記事を中心に、別の媒体に載った記事や書き下ろし原稿を加えたものです。いずれも大幅に加筆修正し、時事的な要素を抑えて美術をめぐる普遍的な問題につなげようとした。いくつかのテーマは、『欲望の美術史』『美術の誘惑』(いずれも光文社)や『裏側からみた美術史』(日本経済新聞社)にも書いたことのあるものですが、やや視点を変えています。(宮下規久朗)

**宮下規久朗『聖と俗 分断と架橋の美術史』** 岩波書店 2018年5月

私がこの十数年に発表した論文の中から、「聖と俗」というテーマによって選び出し、さらに新たな論文を加えて一冊に構成したものです。中世以来、西洋美術は聖と俗をどのように表現してきたか、それが宗教改革によって分離・融合し、近代美術でどのように展開したかという問題は、私の一貫したテーマでした。幸い本書は、朝日、読売、産経、日経といった新聞各紙や複数の雑誌の書評で取り上げられました。(宮下規久朗)

**奥村弘・村井良介・木村修二編****『地域づくりの基礎知識1 地域歴史遺産と現代社会』** 神戸大学出版会 2018年1月

本書は、神戸大学出版会が発行した記念すべき第1冊目の書籍で、「地域づくりの基礎知識」シリーズ(全5巻)の第1巻です。現在、各地で取り組まれている地域再生や地域づくりでは、しばしば「歴史や文化を活かした地域づくり」というスローガンが掲げられていますが、地域の歴史・文化、また多様な地域歴史遺産を保存し、地域づくりに活用していくためには、どのような課題があり、またどのような可能性があるのかが問われています。本書では、現状の地域課題とそれが歴史・文化に与えている影響を理解し、歴史・文化の地域づくりへの活用の可能性を考え、また専門家だけでなく、地域歴史遺産の活用・保全の市民的な担い手を広げていく必要性などについても論じています。(木村修二)



## インターナショナル・アワー

文学部では交換留学やKOJSP（神戸オックスフォード日本学プログラム）などで神戸大学に在学している留学生を対象に、留学生同士や文学部生との交流、あるいは日本文化に親しむのを目的として、インターナショナル・アワー

を開催し、さまざまな企画を行っています。

今年度も、オープニング茶話会にはじまり、茶道体験会、夙川鯉のぼり見学、バス見学旅行などを楽しみながら、互いに交流を深めました。



オープニング茶話会



茶道体験会



夙川鯉のぼり見学

## 2018年

### 留学生体験記

半年前ぐらいに日本へ来て、これまで神戸での生活をとても楽しんでいます。留学するという事は、学的な経験だけではなく、自国と違う文化や社会にだんだん慣れてきて自分を成長させることです。ただ、最初に何よりも私を困らせたのはカルチャーショックではなく、毎朝大学まで山を登ることでした！

神戸大学には、世界各国からの留学生や外国人の先生もいて、インターナショナルな雰囲気を感じられます。

私はいまのところ日本語のレベルが少し足りないのですが、まだまだ日本語での授業を受講できず、受けている授業

のほとんどは英語で教えられているものです。これらの授業は、日本人の学生にとっては英語の勉強や留学生と知り合う良いきっかけになると私は思います。もし恥ずかしがって外国人の留学生と話せなかったら、気にしないでください！実際、多くの留学生は勉強だけのために日本に来ているわけではなく、新しい友達を作りたい人も多いのです。

これからもっと頑張って、この留学経験が実を結ぶように一生懸命に勉強していきたいです！

Perrone Francesca（交換留学生、イタリア）

慣れた環境を離れて、今までと違う世界に一人で向き合ってきました。振り返ると寂しい時期もありましたが、今は神戸大学で1年間留学することができて本当に運がよかったと思っています。

神戸大学の一番の良さは学生間のコミュニケーションにあると思います。私は神大生と話すことを通じて、グローバル時代のリーダーらしい心掛けができていたと感じました。また、皆さんは留学生の私に分らない授業の内容や日本語表現について教えてくれたので何度も助かりました。

また、神戸大学の先生方は学生に熱意をもって真剣に接

してくれます。特に国文学専修の教授は、授業中に理解しやすい例を挙げてくださいたり漢字を分かりやすく書いてくださったりしました。そのお心遣いに変感謝しております。

そして私はこの神戸での生活をきっと忘れないでしょう。神戸はとっても景色がいい所です。六甲山から眺める夜景は本当に素晴らしいと思います。

神戸大学に入学の機会があれば逃さないようにしてください。

金鮮玗（交換留学生、韓国）

## 文学部同窓会「文窓会」主催 ＜新入生歓迎ティーパーティー＞

4月18日(水)午後3時30分から、文学部A棟1階の学生ラウンジ・学生ホールで、毎年恒例の同窓会(文窓会)主催「新入生歓迎ティーパーティー」が開かれました。

文学部生として入学した新入生は、1年次の後半に自分の進むべき専修を決め、2年次からそれぞれの専修に所属します。このティーパーティーは、新入生の入学を祝うと同時に、専修ごとにブースを設け、そこで教員から直接話を聞いて、専修決定の一助にしてもらうことを目的としています。

パーティーは、文窓会副会長吉田浩次さんと文学部長奥村

弘先生の挨拶で始まりました。会場中央のテーブルには軽食と飲み物が用意され、その後新入生は好きな食べ物と飲み物を手に、各専修のブースを回ります。少人数教育を特徴とする文学部は、教員と学生との距離が近いことがひとつの特徴であり、新入生たちもこの場ではじめてその文学部の雰囲気を経験することになったことでしょう。

今年度は、例年に比べて参加者も多く、あちらこちらで大きな笑い声が上がると、ずいぶん盛り上がっていました。新入生同士の交流も深まったように感じました。(河島)

## 神戸オックスフォード日本学プログラム第6期生修了式

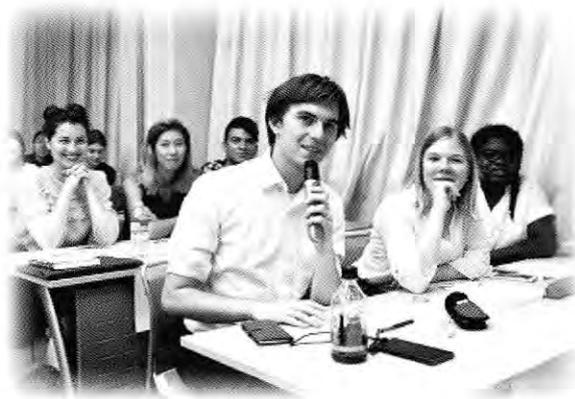
8月8日(水)午後1時30分から、瀧川記念館大会議室で開催されました。このプログラムは、オックスフォード大学との協定に基づき、同大学東洋学部日本学専攻の2年生全員を、神戸大学文学部で1年間受け入れるものです。

第6期生の9人は昨年9月末に来日し、特別聴講学生として午前中は日本語を、午後は日本の様々な面について学んできました。修了式では、同窓会やホームステイ先の方々、教員やチューターの学生など多数の聴衆の前で、一年間の学習の集大成を発表しました。

発表テーマは「集団主義と個人主義の違い:和の効果」、「北

条政子の権力形態」、「『千と千尋の神隠し』に見られる現代日本における美意識」、「日本人と変化」、「90年代から現在の関西におけるアンダーグラウンド音楽シーンの推移」、「日本の統規制についての西洋人の意見と理解」、「明治維新が日本人の西洋観・近代化観に与えた影響」、「滋賀県針江における持続可能な水利用」、「理想的な女性のイメージ」でした。

活発な議論が行われ、また、修了式後のパーティーでは、賑やかな雰囲気の中、KOJSPの学生たちは参加者と一年間の思い出を語り合い、別れを惜しんでいました。



神戸オックスフォード日本学プログラム第6期生修了式

## 文学部オープンキャンパス

8月9日(木)午後、例年通り、文学部のオープンキャンパスが開催されました。事前申し込みをされた高校生やご家族の方がたは、初めに百年記念館にて平成31年度入学試験、学部教育、就職状況などについて担当者から説明を受け、また在学学生による学生生活の体験談を聴かれました。

その後、文学部各専修の説明がそれぞれの教室等で行われ

ました。専修ごとの説明は、詳しい教育・研究内容に触れることができ、また専修によっては学生も交えて質問や疑問に答えてもらえるため、関心も高いようです。なお文学部ではここ数年、高校の先生方を対象とした懇談会も、あわせて実施しております。

## パリ第10大学ナンテールとの研究教育交流 — 現代における芸術と哲学 —

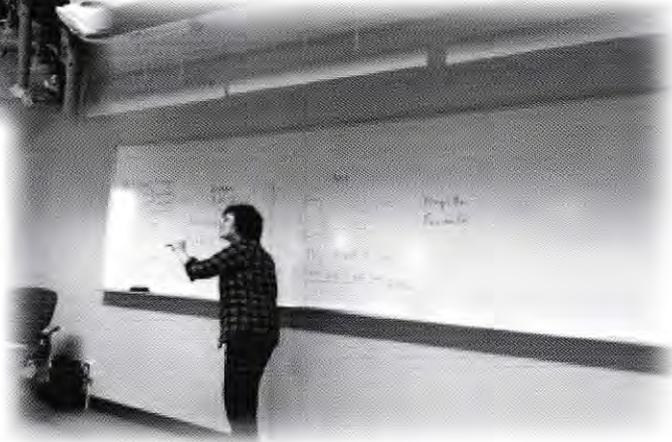
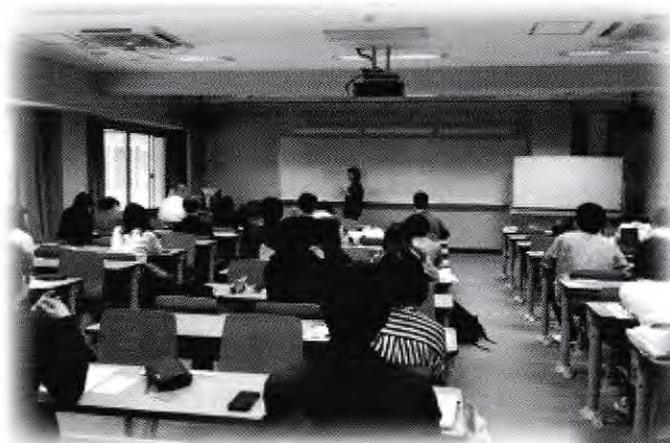
パリ第10大学はパリの西部に位置する人文・社会科学に特化した伝統ある研究機関で、ニコラ・サルコジやエマニュエル・マクロンなど政治的指導者を多数輩出していることでも知られています。神戸大学文学部はパリ第10大学と昨年度から本格的な交流を始めています。昨年の夏に神戸大学の学部学生・大学院生計4名と教員2名がナンテールを訪れ、現地の大学院生や教員と共同の研究発表を通じて学生指導をおこないました。今年度が始まってすぐの4月半ばに、パリ第10大からアンヌ・ソヴァニャルグ Anne Sauvagnargues 教授が神戸を訪れ、学部学生や大学院生に講義をおこない、大学院生に対しては研究指導をする機会も設けられました。ここでは前者を中心に簡単にご報告します。

1日目の4月19日水曜日10:30から、文学部1階視聴覚ホールにて学部学生を対象にした「初学者のための美学入門」講義が行われました。約50名の出席者を迎え、ほぼ満席状態での教室のなか、講義は英語で進められました。講義においてソヴァニャルグ教授は、西洋における美学理論の系譜と変遷について、ユーモアや豊富な実例を交えながら、的確でありながら非常に明解な説明をおこないました。

ソヴァニャルグ教授によれば、西洋の美学・芸術学は、芸術創造や作品との関係で時代を通じた三つの種類に分かれるといいます。第一期はアリストテレス『詩学』に代表される

古典的な立場であって、この時期の美学理論は、詩人が詩を創作するときのような、芸術創造のための理論でした。第二期はカントの『判断力批判』における美学理論であり、カントによって芸術を鑑賞の対象として考えるときの心のあり方が本質的なものとして考えられるようになりました。第三期は、ソヴァニャルグ教授が専門とする現代フランス思想における芸術観であり、教授はそこにおいて、現代における芸術の意義は思考に先立ち、思考を先導するものであるという定義をおこないました。つまり現代において芸術は時代に先駆けて潜在的な問題を提起する存在となっているのであり、芸術作品として現れる時代の徴候や病を「治療する」ための思考こそが、哲学的思考の意義なのであると結論しました。

芸術学専修以外の学生を多数集めて行われたこの講義において学部学生に提示された問題とは、現代において人文学を学ぶことの意義はどこにあるのか、という点であったように思われます。古いものを鑑賞するにとどまらず、そうしたものをどのように「生かす」べきであるのか、という問題意識は、人文学を志した多くの若い学生にとって触発的なものであったに違いありません。今回の機会を準備した身としては、今後もこうした交流を続けることで、専門分野に寄与するのみならず、それにとどまらない文学部的学問意義や面白さについて広く、かつ深く考えていきたいと思っています。



## 青野原、その後

私は2017年3月31日に退職いたしました。相変わらず地域連携の関係で人文学研究科地域連携センターにお世話になっております。不思議なことに青野原俘虜収容所関係の情報は今でもボチボチ出てきて、また海外の研究者が情報を求めて連絡してきます。そんな中にルーマニア出身で日本学を学んでいて、今はルーバン大学で研究をしている人がいます。その方と大阪駅前のヒルトンプラザでお会いしました。彼は研究の方向としてルーマニアと日本を結ぶようなテーマを模索していたのですが、その中で発見したのが青野原で捕虜だったルーマニア系のドゥミトゥル・ニストルという画家でした。ニストルは、彼が乗っていた巡洋艦皇妃エリーザベト号や収容所の風景を水彩画に残しています。またそれに添えて手記も残しています。ニストルの絵と手記はEUのサイトeuropeanに入って、nistorで検索すると見ることができます。

百聞は一見に如かず。彼の描いた姫路・景福寺の風景から捕虜たちの生活を垣間見ることができます。捕虜一人に割り当てられた空間はほぼ畳一畳分、そこに布団を敷いて寝て、昼間はたたんで生活空間が作られます。枕もとの壁に自分の

## 大津留 厚

持ち物が掛けられています。手記には彼の経歴が述べられています。オーストリア＝ハンガリーのルーマニア系の人たちが住んでいたのはトランシルヴァニアという地域で、そこはハンガリー王国に含まれていました。ニストルは徴兵されると、ハンガリー王国国防軍に配属されてハンガリー人の指揮下に入ることを嫌って、帝国全体の組織である海軍に志願します。その結果皇妃エリーザベト号に乗ってアジアまでくることとなります。そして青島で日本軍の捕虜になって姫路、青野原で収容されると、皮肉なことに同じハンガリー王国出身ということでハンガリー捕虜兵と同室になります。ハンガリー語が上手には話せないニストルは少数派のルーマニア系として、自分たちのアイデンティティを大事にします。姫路や青野原の収容所がミニチュアの多民族社会であったことはこれまでも言われてきたことですが、当事者によって語られたものとしてはこれが初めての手記になります。

そんな新発見をまた皆様にご披露する日があることを願って、近況報告とさせていただきます。

神戸大学名誉教授(西洋史学 2016年度退職)